

## 地域の伝統文化を受け継ぐ人々 山鉾のひみつ

祇園祭は、千百年の伝統を有する八坂神社の祭礼です。巡行する鉾のうち最大のもは12トンにも達し、組立・巡行・解体には延べ180人もの人手を要します。33基の山鉾が巡行する祇園祭はそのスケールも桁外れです。過去何百年に渡って使われてきた山鉾の懸装(前・後掛や胴掛東面・西面)には、日本はもとより中国、ペルシャ、トルコ、インドの絨毯、ベルギー製タペストリー等、精巧な飾りが使用され、今日みるような豪華なものとなりました。



『北観音山』の山鉾

### 『北観音山 前掛』八角星メダリオン紋様ムガル朝インド絨毯

この八角星メダリオン紋様の絨毯は、ヤン・ステーン作の絵画「アントニオとクレオパトラの宴」をはじめ、数々のフランドル(オランダ)絵画に登場しながらも、現存していない幻の絨毯とされていました。また、日本では、イラン製ペルシア絨毯とされていました。

メトロポリタン美術館の梶谷宣子研究員が京都で撮影した山鉾の写真の中にこの絨毯が写っており、たまたまその写真を見た同美術館の専門家ジェームズワットは、幻の絨毯が極東の地に存在していたことに驚きました。欧州では絨毯は日常品だったため捨てられていましたが、日本では装飾美術品として扱われたので、文化のタイムカプセルとして残ったのです。さらに調べてみると日本にはこの『幻の絨毯』が3枚も存在していました。あと2枚は『函谷鉾』と『愛知県徳川美術館』所蔵のものです。これらはオランダを通じて東インド会社などから購入された可能性が高く、『北観音山』の絨毯は京都の商人達が残した『寄進帳』から寛政3年(1791)と記されています。



八角星メダリオンインド絨毯

### 『鯉山鉾』欧州絵画』トロイア戦争タペストリー

鯉山鉾の欧州絵画タペストリーは1枚の大きなタペストリーを9分割したものの一つで「天竺織」とあります。このタペストリーの修復時に、周りの赤羅紗を外すと、BB(ブリュッセル-ブラバント)という文字が出てきました。そこで鯉山町は、ベルギー王立歴史博物館に調査を依頼しました。縁飾りの構図は、①鳥(空)、②動物(大地)、③古代の神と魚(海)であることから、1600-1620年代に作られたものであり、図像的には木馬で有名な「トロイア戦争」がテーマであるとのこと。そして、5枚連作の1枚とのことでした。そこで国内で調べてみると、祇園祭に2枚(尾張藩⇒松坂屋の前身「伊藤呉服店」⇒京都商人「藤倉十兵衛」、紀州徳川家⇒三井本店)、東京都(オランダ商館から幕府への献上品、焼失)、石川県(加賀前田家所蔵 徳川家からの下賜品)、滋賀県(長浜曳山祭の山車装飾 元来1枚だったのを2枚に分断



トロイア戦争タペストリー

他方は祇園祭鶏鉾にて使用)に1枚ずつ残っていることが判明しました。こうして見ると、オランダから徳川幕府に渡った5枚のタペストリーが、増上寺・加賀藩・尾張藩・紀州藩などに移り、さらに一部のタペストリーは借財を背負っていた藩から京の町衆へと流れたという道筋が見えてきます。

## 『長刀鉾』 梅の木模様、クーフィー体絨毯

この絨毯は他には例を見ない不思議なデザインといえます。さらに特殊なのは絨毯の素材で、とても硬くて粗い繊維を使っています。色彩は地味で赤は使われておらず、触るとゴワゴワとしています。デザイン、素材とも、これに似た絨毯は見つからず、世界で唯一のものと言えます。

真ん中の梅は、中国北部で織られる花鳥文様と共通しています。ボーダー(周縁部)は、イスラム表現であるアラビア文字を図案化した意匠で縁取られています。礼拝用絨毯などには、コーランの章句などの文字が装飾として表現されますが、この絨毯の周りに織り込まれたアラビア文字はクーフィー体という古いタイプの書体です。オリエント地域では、多くのデザインがイスラム化以降に洗練され、左右対称なアラベスク文様や幾何学文様がモスクなどの装飾に好まれました。祇園祭の長刀鉾絨毯には、遠く離れたトルコのコンヤ絨毯と同じモチーフが使われています。イスラム文化と中国内陸文化が同居したこの幻の絨毯はいつ、何処で制作されたかについては、現在調査が進められています。



クーフィー体絨毯

- ・ある染織の専門家は、そのくすんだ暗い色使いから、「赤の使い方を知らない辺境の人々が作った」として、植物が豊かでない砂漠(タクマラカン砂漠あるいはゴビ砂漠)を産地と推理しています。
- ・ワットは、モンゴル帝国によりイスラム文化圏と中国文化圏が交流した時代の可能性に言及しています。
- ・ロンドンの絨毯専門誌発行者エバレスは、チベットで共通のボーダーを持つフラグメント(破片)を発見し、そちらは炭素の同位元素測定により、制作年代は1295-1460年に織られたものとしています。
- ・日本の研究機関においては、DNA分析の結果、牛の毛の他に中国の北西部に生息しているチベットカモシカの毛がヒットしました。これは制作された場所が北西部の高山地帯であることを示唆しています。ただし、チベットカモシカの毛はかなり柔らかいことから、これを疑問視する声もあります。

このように絨毯の産地は種々の説がありますが、いずれにしろ中央アジア内陸部と思われる。強大なモンゴル帝国は侵略と破壊を繰り返す中で、絨毯織り技術を西から東へ、文様を東から西へと、東西文化交流を繋いできたといえるでしょう。その影響がこの絨毯に見て取れる事は、意味深いことです。

## 山鉾から広がる遠大な世界

この他にも、これも世界に一枚の月鉾「17世紀ムガル帝国の掛物ポロネーズ絨毯」、南観音山鉾「ペルシャ・サファヴィー朝の王侯貴族の下地に金銀を入れた絨毯」など、世界でも1点~数点しか残っていないような貴重な絨毯が山鉾の装飾に多用されています。円山応挙作「金地彩色草花図」岩城清右衛門作「源氏物語五十四帖扇面散図」など日本古来のものに加えて、国際色豊かに様々な装飾が施されている祇園祭の山鉾は、まさに動く美術館です。(現在は貴重な絨毯は別保管し、代替品を用いているものもあります)



ポロネーズ絨毯

京都の人達は、絨毯は巻くことなく桐箱に入れ、高温多湿な日本において数百年にも渡って完璧なまでに保存してきました。それは遠大な歴史や文化、人々の思いや願いも合わせて伝え、受け継いできたことも意味します。様々に異文化のものを受け入れ、自国の文化に融合、昇華していった人々の柔軟性には驚かされるばかりです。だんじりが地域文化の融合ならば、山鉾は国際文化の融合と言えましょう。祭りを通して歴史や文化を見通すと、また新たな広がりや奥行きが生まれてくるようです。